

第2回 尼崎市生涯学習審議会 会議録要旨

日時	令和4年11月22日（火）午後6時30分から午後9時まで
場所	尼崎市議会棟議員総会室
出席者	（委員） 足立委員、渥美委員、江田委員、大槻委員、田井委員、田中委員、中西委員、久委員、松岡委員、松村委員

■議事内容

1 開会にあたって

傍聴者の確認

傍聴者 なし

2 市長より説明 施策1に横ぐしを刺す仕組みづくりの検討状況について

◆市長

本市では施策評価を行っており、市議会にも提出している。この評価を元に来年度向けの政策査定を実施しており、現段階であれば意見が来年度に反映できる可能性がある。大きな予算の計上となると間に合わないが、気にかけるべき視点等のアドバイスはいただきたいタイミングなので、ぜひ生涯学習審議会委員や本日出席いただいている教育委員の皆様にもご意見をいただきたいと思っている。

今年度より新しい総合計画に合わせた施策評価を実施し、これの1丁目1番地である施策1を自治のまちづくりの基盤パート「地域コミュニティ・学び」とした。そこに4つの展開方向、地域振興・文化・歴史・スポーツを設けた。なぜこれらを施策1にまとめたのかを、図にしたものが資料3「自治のまちづくりの実現に向けて」である。これが非常に難しく、どのように繋がりを共有しつつ、施策の振り返りを実施するべきかを悩んでいるところである。しかし、教育委員会と市長部局がもっと一体的になるべきであることだけは間違いないと思っており、本日は教育委員にも出席をいただいた。

資料3の図のどこが深い繋がりになっているか説明すると、まず文化については、左上の緑の円内の「文化ビジョン」と示しているものが行政計画に当たるもので、赤い四角で示している「文化ビジョン会議」がそれを司る審議会にあたる。この分野だけで既にこれだけの量がある。文化ビジョンとは、いわゆるホールで吹奏楽を行うこと、美術で地元発祥の白髪一雄氏を広めていくこと、近松のまち・あまがさきを推進していくこと等を行っており、これに文化ビジョン会議として先生方がいる。

ここと非常に関連が深いのが、教育委員会のパートの「文化財保存活用地域計画」で、審議会は「文化財保護審議会」がある。これらのタイミングが微妙にずれていて、文化ビジョンは完成間近であるのに対し、文化財保存活用地域計画は今から作る。この文化財保存活用というのは国の法律で、文化ビジョンの上の法律は文化芸術振興法だが、文化財保

存活用地域計画は文化財保護法である。このように国の法律は縦割れているが、本市としては非常に重複している状態である。

文化財の1つとして遺跡がある。この特徴として、宝物として保存するだけでなく活用していかないと、保存に対してお金を使っていくことへの理解も得られず、実際に何のために保存するのかという話になるため、そのバランスをしっかりと考える必要がある。それに加えて無形文化財として、祭りやだんじり等がある。近松のまち・あまがさきも何かに指定されているものではないが、尼崎市として、近松門左衛門はまちの文化財と位置づけている。守り・引き継ぎ・活用していきたいものをみんなで定め、文化財とは市民の財だということを改めて位置付ける計画を教育委員会で作ろうとしている。このように、文化でも非常に重複するため、それぞれ縦割れることがないようにと私は何度も繰り返し言っている。

次に「図書館基本的運営方針」についてである。これは本市図書館の開館100周年の際に、こんな図書館にしていこうということを教育委員会で整理したもの。現在の本市の図書館機能は、南北に大きな図書館が1館ずつあり、あまがさき・ひと咲きプラザ内にも図書館機能がある。そして、地域にある生涯学習プラザのうち、旧公民館を引き継いでいる生涯学習プラザには、図書スペースがある。旧公民館の生涯学習プラザと図書館はシステムが繋がっているため、図書館で借りた本を旧公民館の生涯学習プラザで返却が可能である。しかし、旧地区会館の生涯学習プラザではまだ返却できず中途半端であることから図書館とのやりとりを良い状況にしたい。さらに、当然に各学校に図書室があり、これと図書館、生涯学習プラザの繋がりや連携も中途半端な状態である。

次に教育委員会の地域学校協働活動については、学校毎に地域の様々なボランティア等をネットワークし連携していくことを進めている。その先には、学校運営そのものを地域の人たちと一緒に考えていくコミュニティスクールの導入が目指されている。当然に小学校区に1人の地域担当職員を置き、防災訓練や様々な学びを共に進めていこうとする地域課と地域学校協働活動・コミュニティスクールというのは極めて親和性が高い状態である。更に言うと、私の問題意識としては、自治のまちづくりとはシチズンシップをどう支えるかということで、地域の学びの中でシチズンシップが高まっていることと、学校教育において子供たちのシチズンシップをどう育むかという話もちろん繋がっており、公民館、文化財、図書館と学校教育も当然により連携することが望ましい。

ちなみに、地域学校協働活動とコミュニティスクールの話は、社会教育法に則って設置している社会教育委員会議で議論されており、図書館等のことも最後は社会教育委員会議で議論されるが、文化財保存活用地域計画を作るにあたっては、文化財保護審議会という会議体で審議し、地域と一緒に協議会をつくることとなっている。

さらに「スポーツ推進計画」があり、審議会は「スポーツ推進審議会」がある。スポーツとは当然に学校教育の中でも推進されている。また、中央地区と園田地区は地区体育館と生涯学習プラザが併設となっている。この地区体育館でも健康づくり等を行い、大きな大会の誘致はベイコムを中心に実施し、高齢者のフレイル予防等もやっている。

教育については、学校教育や社会教育を教育振興基本計画という更に上位の計画で束ねており、施策評価の中では教育振興基本計画の構成要素がいくつかの施策に割れて出てく

る。教育振興基本計画だけで1つの施策では収まらない。ただし、学校教育のパートはおおむね施策3「学校教育」に入っている。

この関連性を縦割れずに上手く進めていきたいというのが今の問題意識である。これについて悩み続け、内部で何度もミーティングを繰り返したが上手くまとまらず、この資料3「自治のまちづくりの実現に向けて」を作るだけでも精一杯という状況である。しかし、私は社会教育委員会議でどんな議論されているか十分に共有されておらず、私達が生涯学習審議会で一生懸命やっている取り組みが社会教育委員に共有されていないと予測しており勿体なさを感じている。しかし、全部の会議で関係者全員を集めるのは不可能で、開催できたとしても良い会議にならないので、どうするのが良いかと悩んでいるというのが現状報告である。

という訳で、審議会をどうするのか以前に、内部の担当職員レベルも十分に連携ができていないというのが現時点での問題意識である。まずは、そこを整理してから、生涯学習審議会の今後の方向性を提示したいと考えている。

この話をした理由は、今から施策1の施策評価表を見ていただくにあたり、何故この4つの展開方向がセットになのかを共有したいということ。また、こういうことに悩みながら、4つの展開方向の振り返りを我々は行っているが、まだ全然、横ぐしを刺した振り返りになっていないということを報告したい。

●教育委員

この資料3「自治のまちづくりの実現に向けて」の図だと、社会教育委員会議がコミュニティスクール等の学校園における審議会として置かれているように見える。

◆市長

図書館等も最終的には全て社会教育委員会議に入る。

●教育委員

では、本来的な社会教育委員会議というのは、社会教育全般の広範なところを見る委員会という認識で間違いないか。

◆市長

私はそう希望しており、教育委員会にそうお願いしたい。ネーミングと実態がズレているのではないかというのが私の教育委員会に対する問題提起である。

●教育委員

それに関しては同感である。

3 施策1の内部評価に対する意見交換（グループ討議）

2グループに分かれて、グループ内で討議を実施。

- 小グループ（展開方向 (2) 文化・(3) 歴史）
- 小グループ（展開方向 (1) 図書・(4) スポーツ）

4 全体共有、質疑応答

○委員（小グループ代表）

各展開方向の説明を受けた後に出た意見を羅列で発表する。

文化については、評価がアウトプットで終わっており、アウトカムになっていない印象を受けた。これは常に出てくるテーマである。次に、文化は芸術文化・歴史文化・生活文化とあり、生活文化は生活と違うが、これらの仕訳はどうなっているのか。次に、尼崎市内で評価をしているが、評価と言うからには他都市も入れる必要がある。次に、文化とは色々あり、お金をかけずに街角でできるものもある。一方で本物に触れるというドキドキ感も、文化として演出すべきではないか。そういったことの評価について、行政は自ら行ったことを自ら出来たとしているが、市民側からの評価が必要である。次に、文化は他都市もたくさん実施しているので、そこに行きやすくすることや、参考にさせてもらっても良いではないか。次に、尼崎市らしさを出せるような文化はどんなものがあるのか。

先ほど市長から話があったが、こんなに面白い議論を他の審議会の人は知らない。これが問題ではないかという意見も出た。行政評価だと行政のことだけだが、市民もたくさん文化のことやっているのだから、そこを見なくてはいけないのではないか。こういうことを議論できる場を市長は求められているのだらうと思い、意見交換を行った。

歴史については、歴史博物館の評価を見ると抽象的な議論が多く、あまり抽象的に書くと来年も同じことを書くと忠告があった。次にミュージアムというからには、尼崎市には色々なことがあったとフィールドミュージアム的な発想があっても良いのではないか。次に、歴史的公文書を整理していると言うが、そうすると何件を整理した・何人が使ったと、またアウトプットの評価になる。歴史博物館のパンフレットには、未来に向けた新たな活動が生まれる拠点と書かれているので、未来に向けた新たな活動が生まれたときに良かったという評価をするのではないか。でも、公文書を使う人数は少ないので、数勘定してもいけないという話。次に、学校との連携はまだ不十分ではないか。次に、地味だが地区毎の祭りもシビックプライドも大事だが、他都市の人にも見てもらう必要があるのではないか。次に、尼崎市の特徴をもっと生かそうということで、尼崎市は他都市から来られた人が多く、例えば沖縄県の文化をそのまま持っている方もいるし、県人会が多い場所なので、こういった多様性・多文化ということ、この歴史の文脈の中で上手く出せないだらうかという意見も出た。

○委員（小グループ代表）

評価の方法論であるとか、行政のやり方についてということは、我々の方はあまり出でおらず、図書とスポーツについて現状どのようなことをしているのか、そしてそれについてどのような課題意識を持っているかを、まずは報告いただいた。その中で、市長の話と、この図書・スポーツの検討は一体どう繋がるのかという疑問が出た。我々が話をしていく中で、

要するに文化と教育と地域振興という3つのフィールドを繋いでいくための方法論を色々模索しているが、それらを繋ぐ触媒のような形で図書館やスポーツがどう機能するのかということを考えて欲しいということではないかと勝手に我々が解釈し、どうなれば何かと何か繋がっていくような運営ができるのだろうかということ、図書・スポーツについて検討するという話になった。

例えば図書の場合は、尼崎市市内でも地域によって人口密度が違っており、JR沿線は人口がたくさん増えているが、そこに図書館という基本的なものがないことについて、どのように意味付けをしたら良いだろうかという話があった。その他に、各図書館によって重点的な機能が違う部分がある。学校の図書室、生涯学習プラザの図書室、中央図書館でそれぞれ機能は違うが、求められているものは何かという話があった。その時に、誰に求められているのか、もう少しターゲットグループを丁寧に考えていく必要がある。まず、例としては、子どもに読み聞かせをするスペースが欲しいと思っているような図書館活動グループと、資料を調べあげ、データ整理をする時間を作りたいという人が同居する図書館となると、かなり規模が大きくなる。そうすると、小さな図書館はそれぞれ専門性を持って良いのではないかと。専門性を持った各図書館がネットワークするような状況も考えられる。

もう一方で、あらゆる市民が一緒にたになり、自分の生活の中で楽しみを持ちながら行ける場所があっても良い。1つの意見としては、本を読みたいという欲求だけを満たしてくれるのではなく、例えば、親子と一緒に楽しめる、子供にも大人にも楽しみがあるようなものの中に、本を読むというような、そういう図書空間があっても良いと思う。これをモデル的にどこかで展開する。しかし、全部で一気にやるのではなくと、何かモデル事業として、尼崎の面白いところ図書館、特異的な図書館というのを1つ作るという話もあった。図書館は色々なアイデアが出そうで、これから街を発展させていく時の人と人との繋がり方の質、ある種の特徴を出していける質なので、図書館をもっとアピールしていく必要性を感じる。

そして、図書館に関しては報告の中に、多文化主義の匂いがあまりなかった。先ほど別の班の発表でも、文化を繋げる時にどういう人と文化なのかという話があった。様々なルーツを持っている人たちの小さな文化を大きくすることによって、尼崎市が輝くきっかけができるじゃないか。図書館は社会教育施設の中でも、実は最も世界的に注目されている施設で、多文化主義も最初に入った。公民館よりも更に多文化主義である。そういう多文化主義をもっと少し表に出す図書館もあって良いのではないかと。

スポーツについては、コロナ禍にも関わらず様々な角度で行っており、非常に充実している。ただ、実質的にスポーツ活動を支援している団体が、どういう団体なのかということについて、行政がどう理解して、どうサポートするのが見えない。もう少し具体的に言うと、尼崎市の場合は、スポーツクラブ21という兵庫県の地域総合型スポーツクラブの施策に則って進めているところで、スポーツ振興事業団という組織が中心になってスポーツを進めている。そこで、スポーツを幅広く誰もが選択できるような社会にするためには、どういうしかなければ必要かという話になった。つまり、上から俯瞰すると尼崎市は野球、サッカー、空手とスポーツがたくさんある。しかし、市民の目線で見ると本当に上手く選べるような仕組みになっているかどうかについて学校と地域がうまく調整し合うような事も今度必要だという意見もあった。

部活動の地域移行もゆっくりやっついていかないと、おそらく問題が色々出てくるだろうし、そのことを通じて、地域学校協働活動の1つの柱にすることも考えられるという意見が出た。

○委員

先ほどの全体共有の中で、市長の話と我々の議論がどう結びつくのかという話があった。私はあえてそういう質問をせずに、ぐっと腹の中に納めている。おそらく、市長が示した資料3の図が、ある意味分かりやすい。この3つの円が今のくくりになっている。だから。それを一旦解体し、別のくくり方をするというのが1つの案だと思う。例えば、空間という観点から見ると、学校・図書館・体育館という施設や地域というようなまとめ方がある。それで、どう展開できるのかという空間の側面からちょっと整理をしてみる。あるいは、ライフステージとして生まれてから死ぬまで、どの段階でどういうことがなされるのかというようなライフステージでの整理とか。あるいは、その資源として何が使えるのか。文化財や図書等、どういう資源を使おうとしているのかとか。あるいは、スポーツ・音楽・美術等というような、いわゆる手法論としてどうなっているのかということで、くくり直し、改めてこの円がどこにぶら下がっているのかというのを見ると、おそらく自動的に繋がっていくという気がするので、そんな観点でも考えていただければ嬉しいと思う。

○委員

少し話がそれるかもしれないが、私は小学生の時は校庭を何周も走らされるのが嫌いで、自分はスポーツが嫌いだと思い込んで生きてきた。しかし、大人になってから、体を動かすことを楽しく感じている。先日、歴史を学びながらランニングする企画で、一緒に走った人と、小学生の時は走ることが嫌だったが、こういう学びながら子供たちが走ることって良いなといった話になった。そういうことで言うと歴史も大嫌いだったが、それは年号覚えさせられるからであって、大人になると楽しいと感じている。何故、子供の時は楽しくなかったのかということは、本当に大切な話と思っている。歴史を楽しんでいる大人と出会ってないとか、歴史を熱く語る大人を見て、なんでこんなに熱く語るのかと思うこと自体がない。地域と繋がるという意味では、部活の中に大人が混じっていても良いと思っている。それがきっかけでサッカーを始めたおじいちゃんがいってもおかしくないと思っており、そういったもう少し大きいくくりで物を考える必要があるというのが1点。

次に、イエナプランという勉強法がある。例えば、題材がバナナとすると、バナナに対する問いをたてる。バナナの色はこれだけなのかとか、バナナの歴史とはとか、バナナにはどのような栄養素があるのかとか、化学も歴史も社会も全部が1つの題材で行い、そういった1つのものから学びを広げるといったやり方が学校教育にはなく縦割れている。学校教育も含めて何かアイデアを出しながら、それがどこに繋がるかみたいなのが本来できた方が良い。先ほどの年代別の興味関心という話で言うと、アートに触れた人数を指標にする話があったが、それで言うとスポーツに触れた数を数えるとなり、子供たちは量が多すぎて、自分の興味関心からの学びに行けなくなるので、とにかく歴史博物館に行こうとなってしまう可能性がある。全体を考え直す、何が学びに繋がっていくのか。それを生涯学習として全体的に考えたいと思った。

○教育委員

市長の説明のテーマが施策1に横ぐしを刺す仕組み作りということで、資料3「自治のまちづくりの実現に向けて」の図を見ると、繋がりそうな所はあるが、やはり無理をしなくては繋がらない所もたくさんあるということで見ている。

この連携で最も難しい所というのが役割分担で、今までそこにいた人を繋ぐために、情報交換するために役割分担というのを明確にしなければいけないという点と、担当のキャリアの形成が重要となってくると思う。最近スクール・コミュニティーというものが広がってきており、こういう所を全てカバーできるようなものと思っていたが、やはりキラキラしている所ばかり目を向けていては、やり始めて失敗してしまうことがあるので、責任問題や、どこが権限を持つのか、プライオリティをどちらが持つのかという問題も出てくると思うので、対等に連携できるような仕組みを考えておく必要がある。

○教育委員

評価については抽象度の高さや、何を成果とするのかといった点の具体化といった反省点のようなものが話に出ていた。これは、この審議会で従来審議してきたところと通じると思った。施策1に横串を刺す、縦割りを超えていく話について、個人的に振り返っていた。例えばMLA連携という話があったが、今回、あの博物館は博物館でMLA連携しますと言い、図書館は図書館でMLA連携しますと個別に言っていて、一緒にその話が出てこないのを何を連携しているのか分からない。それから、教育委員会と市長部局の事務局からも個別で連携していきますと話がくるが、トータルで連携していくという議論がテーブルに上がってくるのではないので、実際に連携している話を一緒に聞くことや、連携方法を横に並んで具体化していく場所があっても良いと思った。連携していきますという話も縦割りになっているところが反省点と思った。

○教育委員

私は保護司のボランティアの仕事もしていて、現在、尼崎市の重層的支援推進担当と連携をとっている最中である。非常にそれが実を結んでおり、先日も保護司の会議でそれを発表したら思いのほか反響が大きく、大阪の豊中市の方が1月に話を聞きに行きたいとおっしゃっていて、本当に横の連携というのはスムーズに進むと心強いということを体験している。今日は、素晴らしい話をいっぱい聞かせていただき、普段の教育委員会とは違う視点からの話で参考になった。私は個人的に尼崎の面白いところ図書館を1つ作るという話に大賛成で一票入れたいと思った。

○教育委員

今日はとても楽しかった。色々な化学反応が起こり、交流自体に意味があった。教育委員会の中でも社会教育を難しいと感じているところもあったが、公民館が無くなる中で様々な議論を行い社会教育への理解を深めている所だが、結局は人と人とを繋げようと思うと楽しくないとダメだと思う。

尼崎の色々な文化を上手に繋げて、普通の家庭がそこに参加しようと思うには、やはりゲーム的な要素が必要と思う。せっかく尼崎城ができ、ユニチカ、寺町、歴史博物館もあるので、例えば、あの辺りでウォークラリーやスタンプラリーを開催する。尼子騒兵衛さんにもお願いして、そういう楽しいイベントを皆で作ってあげれば、作る過程で地域が繋がりと、歩いて回ることで文化の事をより知ると思う。

先日、伊丹市から尼崎市に渡るウォークラリーを企画してみると思いのほか家族連れが多く集まった。全員で30人位の人が集まり、田能を回り、伊丹の飛行機の発着場を通ってみたり、チョコレート工場へ行ってみたりし、また喋りたがりの先生方が個々に解説をするので勉強にもなった。楽しいイベントをたくさんやっていくと勝手に繋がっていくと思った。

○委員

社会教育委員会に在籍し、尼崎市の社会教育について考えており、図書館や歴史博物館等のことを社会教育委員会会議で議論する立場だが、なかなか尼崎市ではできていない。その理由としては、会議の開催は年3回が精一杯で、それ以上できていない。ただ、尼崎市の図書館の予算が無い中で一生懸命に頑張っている姿は本当に悲しいぐらいに見させてもらっている。本日の話で図書館の可能性というものを感じたので、社会教育委員会会議に持ち帰り図書館についてもっと明るい話をしていけるように頑張りたいと思った。

○委員

偶然に私も大学で様々な所がやっていることが分からないという同じ問題に直面している。例えば、理科系で入学し化学を勉強するとしたら、工学部でも理学部でも基礎工学部でも勉強する。何が始まっているかという、どの学部に入ったとしても、他の学部のところに半年間ほどローテーションで行く。例えば、理学部に入ったのに工学部に半年ほど行く。同じ化学でも他でやっているやり方を学んで帰ってくるということをサポートしている。回数が減ったといわれると元も子もないけど、ある程度の回数をあげつつ、その内の何回かを別の審議会に行くというイメージ。交流と言うと今日も調整して教育委員にお越しただいているが、例えば社会教育委員を長くやっている方が、別の審議会に何回か出るとするのは面白い刺激になると思う。それには日程調整や経費等の後押しが必要という課題もあるが、こういったことを大学で考えて縦割りの解決を図っている。

評価の問題は大学でも大きく出ていて、内部で評価して良かったとしているが、学生は良いのかもしれないが、大学としては良くない可能性もあるという話で、社会に迷惑かけてないかと社会的評価も必要ではないかという話にもなっている。いわゆる頑張っている、何かやっているが、社会的インパクトになっていないことをどうするのかということも課題としてある。

5 市長より 生涯学習審議会へ求めること

◆市長

もう少しで退任するとは思えないぐらい新しいテーマに取り組んでいるところで、まとまらないままの審議会の開催になって申し訳ないが悩みながら進んでいけたらと思っている。

先ほど話が出ていた、縦割りで個別の事務局から連携するという話が出てくるというのは、まさに連携できていないからなので、連携を図るため施策1で1つにまとめた。産みの苦しみがあるのも覚悟の上で進めていきたいと思っており、あとは次の市長に託す。

しかし、今回は生涯学習審議会へ教育委員に来てもらい他流試合をしたように、担当職員も他流試合をもっと進めていきたいという大きなイメージは持ってもらえたかなと思っっている。こういう他の審議会にはない雰囲気では生涯学習審議会は進んでおり、こういったチャレンジも踏まえてミニマムのお願いとしては、今日見ていただいたような内部の評価を、内部で終わらせないために、こういった多様なメンバーのご意見をいただきたいということ。そこから、今日もすごく面白い議論になったので、そこを肉づけしていくイメージを持っている。

それと、本日は協働ガイドラインという冊子を配布している。協働とは阪神淡路大震災を契機に、この世界に入ってきた私の基本となる部分で、どうやったらもっと協働しやすくなるかということを考え続けた12年だった。そこで、行政には行政の事情というのがあるということが行政側に来てみて分かったので、その事情と市民感覚を擦り合わせるような制度や仕組みを作りたいと色々やってきた。もちろん、これも終わりのない取り組みで、色々なメニューをガイドブックにすると同時に、イメージが湧きやすいようにこれを使った事例を載せ、このガイドブックが出来上がった。そして、来年度から新総合計画がスタートするが、市民と共にという自治のまちづくりを基盤にするに当たり、こんな面白いことができた、こんなことをやろうと思ったけどここが上手くいかなかったみたいなエピソードを市民と行政と一緒に白書やパンフレットにしていきたい。それを読んだ人が、こんな事できるのならやってみようとか、失敗も糧にしようというタフな尼崎を見せていくといったものを作りたいと思っている。そういうことを毎年したいという思いがあるということも皆様の頭の片隅に置いていただきながら、この審議会でも引き続きお世話になっていきたいと思っている。だから、私はそういう意味ではやや不完全燃焼ではあるが、今後は一市民として活動する側でいたい。皆さん本当にありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。

▲生涯、学習！推進課長

施策1に横ぐしを刺す仕組みづくりを含めて、内部で議論を深めた上で生涯学習審議会を進めていきたい。次回の生涯学習審議会の日程については、改めて連絡する。